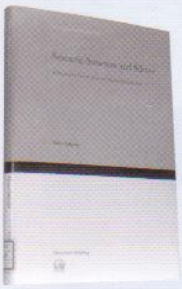
Syntactic Structure and Silence: A Minimalist Theory of Syntax-Phonology Interface [Hituzi linguistics in English:No.9]



by Hisao Tokizaki
Hituzi Syobo
2008.2

大学院生の夏。喫茶店で本を読んでいて、ふとある考えが浮かびました。これで言語をうまく説明できるかもしれない、そう思って続けてきた研究をまとめたのがこの本です。

言語には、語や句のまとまりがあります。日本語の読点も、英語のポーズも、まとまりを区切って示しています。「すもももももものうち」はわかりづらくても、「すもも、もも、もものうち」なら大丈夫。英語も "The girl I met at the party # was very nice." のように、長い主語の後ではポーズを置くことがあります。こうして、書く人・話す人は語や句のまとまりを読点やポーズで示し、それを手がかりに読む人・聞く人は、語や句をまとめて立体構造を作り、意味を理解すると考えられます。そして句点(。)や長いポーズは、文という、より大きなまとまりを示し、さらに改行と字下げや、より長い間(ま)は、段落を示します。本の章ごとに改ページがなされているのは、さらに大きな隙間を示すため。交響曲やテニスの試合だって、楽章やセットの合間に休息時間があってまとまりを示しています。

すきまの長さが構造を示す。このことがいろいろな言語の音や文法や意味に影響していることを考えてきた、僕の二十数年が詰まった本。図書館で手に取っていただけたら幸いです。[801.5 ‖ To33]

(外国語学部教授　時崎久夫)

世界銀行と開発政策融資

本間雅美 著
同文舘出版
2008.3

筆者は2004年度にジョージタウン大学に留学の機会を得た。世銀本部ビルのドアを開けると、「我々の夢は貧困のない世界である」と刻まれた記念碑のプレートが目に飛び込んでくる。本書は、世銀がグローバリゼーションの挑戦に直面して生存理由が問われているなかで、政策改革の監督者としてではなく、国際公共財を貧困国に提供するパートナーとして、いかなる役割を果たすことが期待されているのかを探ることを強く意識して取りまとめたものである。留学中に、世銀の「構造調整融資」を「開発政策融資」に改名されたことと米国の新しい援助機関としてミレニアム・チャレンジ・アカウント(MCA)が設置されたことに大きな刺激を受けた。国際援助の枠組みは多国間援助と二国間援助から成り立っていて、それぞれ固有の課題を抱えているように思えるが、改革の根底においては共通の特徴が認められる。それは、援助の原理が「コンディショナリティ」から「援助の選択性」に大きくシフトしてきたという事実である。「開発銀行」としてだけではなく、地球規模のさまざまな難題を管理する「援助機関」として、世銀がどこに行こうとしているのかに興味のある学生は本書を一読してほしい。[338.98 ‖ H85]

(経済学部教授　本間雅美)

北海道の歴史がわかる本：石器時代から近・現代までイッキ読み!

桑原真人
川上　淳 著
亜璃西社
2008.3

本書は、北海道に関する歴史を52のトピックスで紹介した。旧石器時代から江戸時代までを川上が、明治時代から現代までを桑原が担当している。これまでの多くの『北海道史』の本との違いは、通史的・教科書的な記述としなかった点である。トピックで構成し、それを読んでいくと、北海道の歴史がわかるように工夫した。

また、支配者や為政者中心の歴史ではなく、北海道に住んでいた具体的な人々の姿を描くことに努めた。それはアイヌ民族であったり、囚人や屯田兵・労働者たちである。川上が執筆した前近代では、北海道だけでなく「北方史」という視点で千島列島やロシアとの関係も多く触れた。北海道の歴史を論ずる時、北海道だけを見るのではなく、周辺地域との関係、特に交流や交易が重要な要素であることを強調したかったためである。

執筆で最も苦労したのは、質を落とさず如何に分かり易く、如何に読みやすくするかであった。出版社の編集担当と何十回も嫌になるほどやりとりがあり、時には最初に書いた文章が何度も訂正され、最初の形を呈さなくなる部分もあった。

本書は新聞の書評などでも取り上げられ、好評と聞いている。札大生には是非とも読んでいただきたい1冊である。[211 ‖ Ku95]

(文化学部准教授　川上淳)